

### 第3回山城地域における府立学校再編整備に係る懇談会概要

- 1 日 時：平成16年9月17日（金）午後3時～午後5時
- 2 場 所：京都府総合教育センター第8研修室
- 3 配布資料：別添のとおり
- 4 内 容：府立高校及び府立養護学校の再編整備の具体化に向けて
- 5 主な意見

#### （1）新しい高校の特色について

- ・魅力、活力のある高校が必要である。学力面だけにとらわれるのではなく、雰囲気的にいいものを持っている高校、人間性豊かな生徒を育てることができる高校を目指してほしい。
- ・伝統や校風も大切であるが、統合は魅力ある高校づくりのための良いチャンスと捉えて進めてほしい。  
例えば「理数科」の設置など、より専門的な教育も必要としているのではないか。
- ・統合の際は、ある程度費用がかかっても、心から新しくなって良かったと思えるよう努力が必要。ハード面の充実はもちろんのこと、ソフト面も含めた総合的な教育環境の整備が新統合校に望まれる。  
いずれにしても、新統合校ができて良かったと言われる高校を作してほしい。
- ・保護者は中高一貫教育に大変興味を持っている。小、中で連携が進むなか、そこにどういった形で高校が係わっていくべきか検討が必要である。
- ・生徒が3年間学んで納得できる高校が必要である。勉強に特化した高校もある中で、ボランティア、スポーツに特化した高校があってもいいのではないか。  
義務教育としっかり連動していかなければならない。
- ・地域性を重視したもの、小中学校との連携、学力向上重視、多数の社会人講師、大学との連携、など特色をもった多様な高校がある方がいい。ただし、基本として生徒の自立を促す高校であることが必要である。
- ・教職員がなによりも活気に満ちている夢のある高校が必要である。統合校の出発点は非常に重要であり、特に責任があり活気のある教職員体制が必要となる。
- ・高校を選択するときには、入学時点だけでなく高校卒業時点を見据える生徒、保護者が多いことから、卒業時にしっかりフォローができなければならない。高校は大学連携、産学連携をより進める必要がある。例えば府立大学附属高校などができれば人気が出るのではないか。

## ( 2 ) 高校の発展的統合に際して配慮すべき点について

- ・ 統合には中学生への進路指導の観点からも十分な周知期間が必要となる。できる限り早く現状や進捗状況を地域やPTA等に説明する機会を設けていただきたい。
- ・ 統合する際には該当高校の卒業生に対する配慮が必要。卒業した高校がなくなるのではなく、新しく発展的に生まれ変わるということを十分に認識してもらうことが必要である。
- ・ 山城地域のなかでどのような高校が求められているかを十分に把握し、ソフト面、ハード面の具体的な統合の姿を早期に示していくことが必要である。
- ・ 高校が統合されると、府立高校に入学しにくくなるのではないかと、中学生や保護者の不安を解消していかなければならない。
- ・ 様々な統合の手法があるかと思うが、例えば年次的に募集停止を行った場合に在校生に大きな影響を与える。学校の活気がなくなることを防ぐため、他の高校と交流を図るなど何らかの対策が必要である。
- ・ 募集停止に際しては、在校生に対するケアが重要となる。他府県状況を十分に踏まえ、京都らしさを出してほしい。
- ・ 在校生が募集停止を知ったときのショックは大きい。それならば一気に合併するなど手法として検討すべき。特色ある高校を作るために生徒を犠牲にしてはならない。
- ・ 16年度からの選抜改善により、山城地域の明確な特色化が始まったところであり、結果が十分にできていない中で統合を進めることに危惧している。また地域性はやはり大切にしていける必要がある。
- ・ 様々な地域から生徒が集まることは大切。そういった様々な地域から集まった生徒に対し、高校周辺地域の特性を教育していくことが、高校としての地域連携ではないか。
- ・ 何校も高校がある市もあれば1校もない町村もある中、山城通学圏全体を一つの地域として認識すればいいのではないかと。狭い地域性を考えていった場合はどうしても総論賛成各論反対になってしまう。
- ・ 地域性にとらわれすぎでは確かに統合は進まない。極論ではあるが、昔は山城地域には2校しか高校はなかった。狭い意味での地域にしばられてはいけない。小中学校と高校は異なることを明確にしておかなければならない。
- ・ 山城通学圏の中で、それぞれの高校の役割がどうなっていくのか明確にする必要がある。
- ・ 募集定員の現状から統合される可能性が強いと見られる高校があるが、どのような学校づくりをしていくのか明確に示してほしい。不透明さは不信感を買うのではないかと。

### ( 3 ) 養護学校の再編整備について

- ・ 桃山養護は現在の理念にあわない知的障害単独校であり、早急に総合的な養護学校を建設する必要がある。
- ・ 桃山養護は、校地に傾斜地が多く建物もバリアフリーとなっていないこと、交通事情に問題があり、スクールバスの乗車時間がかかること、教育圏・行政圏・警察圏・福祉圏が通学区域と異なっていることなどから、移転し、総合的な養護学校を建設すべき。
- ・ 障害種別によって、通学する学校が分かれないう、総合的な養護学校が必要である。また、山城地域は地理的に広く、交通面で川の影響が大きいので、地域的なバランスを考慮することが必要である。
- ・ 宇治市では、毎年100人以上の子供が養護学校に通学しており、過去から府に対して設置要望を出しているが、地域の中で学びたい障害のある子供もいる。障害児教育のセンター的役割を持った養護学校が必要である。
- ・ 地域的なものを重視して、地域により近い養護学校を作ることが望ましいが、学校規模については、当初から、その人数に応じた施設設備や学校運営体制を整備すれば200人を超えても大丈夫と考える。
- ・ 南山城養護学校の児童生徒数が増加しており、早急な再編整備が望まれる。また、ノーマライゼーションの実現を図るためには、今までのイメージではなく、市街地に養護学校を設置すべきである。
- ・ 養護学校は卒業後の問題を十分に考えなければならない。保護者の関心も高い。
- ・ 卒業後、一定期間在籍していた学校で働けるシステムを作り就職等へのステップにつなげることも一考してはどうか。
- ・ 地域社会の障害に対する理解は進んできていると思う。ただ、肢体不自由などの外見からわかりやすい障害に対する理解はかなり深まってきているが、知的障害などの外見からわかりにくい障害に対する理解は難しい。そういう意味での出口の難しさもあるので、卒業後の手だてとなる方策が必要である。
- ・ 養護学校の生徒は、卒業後その地域に根付く可能性が高いので、将来的に地元で生活していくことを考え、色々な人たちと様々な交流を深めていくことが大切である。
- ・ 養護学校が現実どこかの地域に設置された時、地域の反応はどのようなものになるのか心配である。PTAなどで、養護学校の実情をアピールする活動が行われてきているが、そのことがどれだけ地域に理解されているかが確かめられると思う。地域に密着した養護学校という考えが受け入れられるよう、十分な事前説明が必要である。
- ・ 京都府では過去に養護学校設置に関わって、準備段階で地元の方々に協力を得るなどして反対運動はなかった。しかし、もっと地域と密接につながる必要があり、丁寧な説明を行わなければならない。

#### ( 4 ) 高校と養護学校の関係等について

- ・ 具体的なことについては府教委が責任を持って行うべきである。懇談会としては、具体案にたどり着くまでに考慮しなければならない様々な要因を出し尽くすことが大切ではないか。
- ・ 小規模な高校に養護学校を併設したとすれば、日常的な交流が深まり双方にとって有益であり、全国的に見ても先進的なものになる。そういった案を具体的に出していてもいいのではないか。
- ・ 福祉を学ぼうとする者が仮にすぐに養護学校の生徒に接する機会あれば、その教育効果は計り知れない。生徒、教職員ともに大きなプラスとなる。
- ・ 高校を発展的に統合した跡地に養護学校を設置するという手法もあるが、高校の規模を縮小して養護学校と併設するという手法もある。